



全学共同利用施設としての多島研センターの役割を考える

富永 茂人（多島圏研究センター長）

センター長を命ぜられて約半年がすぎた。これまで、南太平洋海域研究センター（南海研センター）から現在の多島圏研究センター（多島研センター）まで兼務教員として学術調査や各種委員会に関わってきたが、昭和56年（1981年）に誕生した「南方海域研究センター」に端を発する歴史ある本研究センターの運営に、自分がこのような立場で関わるとは考えたことがなかったので、その責任の重大さに身の引き締まる思いである。今、改めて学内共同教育研究施設としての多島研センターの歴史について振り返るとともに、センターが果たすべき役割、特に国立大学法人化後の役割について考えてみた。

「鹿児島大学50年史」（平成12年）を読むと、南方海域研究センターの設立に当たっては、計画段階では、東南アジアとその周辺域の地域研究を行う6部門からなる大規模な、博士課程の設置発展まで見据えた「センター」が目指されていた。これは、我が国の南九州に位置する総合大学の鹿児島大学では、現在でもなお新鮮で通用する方向であろう。しかし、結果的には、省令施設ではあるが少人数のセンターで発足した。その後、関係各位の尽力で定員増が実現し、

それが、その後の南海研センター（昭和63年発足）、そして現在の多島研センターの原型となっている。多島研センターは、平成10年に南海研センターのシステムを引き継いだ形で発足した。

上記の三つのセンターは、専任教員と兼務教員が協力して、調査研究、シンポジウム、出版・広報などの活発な活動を行い、本学における学部横断的な研究活動の中心を担ってきた。特に、水産学部の練習船を利用してセンターが行った南太平洋島嶼域での海外学術調査には学内だけではなく、学外の研究者も参加し、センターの存在意義を内外にアピールしてきた。しかし、平成14年度に水産学部の練習船「敬天丸」が廃船になったことにより、練習船を利用した海外学術調査が困難になり、併せて、平成16年には国立大学が法人化したことによって、センターを取り巻く情勢や活動は様変わりしてきた。もちろん、専任教員と兼務教員の協力による様々なセンターとしての活動はきちんと継続されており、その面でセンターが果たしている役割には今でも大きいものがある。

法人化後、多くの学部で財政的理由から研究・教育活動は制限される面が多くなるとともに、

外部資金などの獲得が求められ、各教員の研究の自由度が狭く、低下し、研究活動も内向きになってきたように感じられる。そして、文系から理系までの多くの学部の研究者が参加する総合的な海外学術調査の立案は困難になってきている。また、国内の南西島嶼部を研究対象とした研究・調査、プロジェクトや地域連携活動も、部局別に立ち上げられており、そのため相互の連携も希薄になっている。このような、状況にある本学において、特定の分野に偏らず、幅広

い研究・教育活動経験と蓄積が豊富である多島圏研究センターが、多数の兼務教員と連携しながら、研究者間の架け橋となって学部横断・学際的な研究やプロジェクト研究の核となり、その成果を学生教育に生かすような役割を担う必要性は大きくなっているものと思われる。すなわち、今こそ、南方海域研究センター設立時の原点の精神に立ち返り、兼務教員の皆様の協力を得ながら、センター長として伝統ある多島圏研究センターの将来への一歩を創っていきたい。

多島圏研究センター研究会発表要旨

第66回

2006年3月6日

鹿児島湾水銀汚染魚の謎

坂元隼雄

(鹿児島大学理学部)

昭和48年(1973)11月、鹿児島湾北部で漁獲されたタチウオから、魚介類の水銀の暫定規制値(0.4ppm)を超える水銀(総水銀2.55ppm)が検出された。この原因を究明に、鹿児島県や大学などを中心した研究グループがつくられ、湾に流出する河川水、湾内の海水、底質(泥)や魚体中の水銀なごの環境調査が実施された。その結果、農薬、工場排水や温泉水等からの原因説は否定された。また、鹿児島湾の海水中の水銀含有量についても異常は認められずに原因究明は困難を究めた。その後、水銀の発生源探しが続けられ、湾北部に見られるガス噴出“たぎり”に疑いが掛けられていった。“たぎり”周辺海域の噴出ガス、底質、海水の化学組成や生物試料などについて詳細な調査が実施された。しかし、海面上からの調査には限界があることが分かった。そこで、有人の作業用潜水艇“はくよう”[定員3名(操縦員2名)、排水量6.6トン、最大使用深度300m]を用い、海底噴気

孔およびその周辺の試料を採取し、分析することにより新しい多くの知見が得られた。本講演は、水銀汚染魚問題の解明に取り込んだ研究成果の一端を紹介する。

牛の先天異常

濱名克己

(鹿児島大学農学部)

一般に先天異常は「出生時における形態や機能の異常」とされてきたが、今日では、「何らかの原因によって、出生前にすでに正常からのひずみが方向づけられているもの」と、広く定義されている。原因として遺伝と環境の原因があるが、実際には両者の相互作用によることが多い。牛でも人と同様にその種類は多く、日本での発生率は高い。牛の先天異常は、飼育農家にとって罹患子牛の損失のみでなく、同居および血縁子牛の商品価値の低下、母牛の流産死産、難産、不妊症など繁殖障害の増加、飼養管理や育種改良計画の変更など、経済的な影響が甚大である。臨床獣医師にとっても、流産、難産、不妊症などの診療機会が増加し、予後判定や原因の究明が要請される。獣医師はこれらに精通

し、農家に防止対策の実施を励行するよう指導する。また症例を死蔵せずに公表して知見の交流を図ることが病因解明の鍵となる。

第67回 2006年3月13日

好気性微生物群を用いた家畜排泄物の迅速堆肥化及び土壌消毒

榑下町鉦敏

(鹿児島大学農学部)

鹿児島県は日本一の畜産県である。本県の家畜排泄物は年間膨大な量（15年度574万ト）に上る。国は2000年に家畜排泄物の管理適正化・利用促進法など、環境三法を制定した。2004年までに素堀や野積みでの保存管理を禁止し、堆肥への利用を促進することになった。

農産物の生産の行き着くところは「健全な土壌」の維持管理である。有り余っている家畜排泄物を堆肥化すれば食糧生産に欠かせない良質堆肥になる。

そこで、好気性微生物群を用いて家畜排泄物の堆肥化に取り組んできた。その結果、通常では熟成まで3ヶ月間を要するが、好気性微生物群を用いると、水分含量65~70%で増殖し、プロワ槽に堆積し、強制通風後2日間で70~80℃に達し、牛糞堆肥では3週間程度で分解される技術を開発した。このように短時間で熟成した堆肥は慣行栽培は勿論のことだが、有機栽培やエコ農産物認証制度下の化学肥料不使用栽培、化学肥料節減栽培等の作物に栄養分の不足を補う分として施用される。さらに、園芸用施設ハウスでは土壌病害菌やセンチュウ等が原因の連作障害による被害は深刻である。土壌病害菌やセンチュウ類は地温が50~52℃で10分も継続すると死滅する。そこで、好気性微生物群による有機物の発酵熱を利用したハウス土壌の消毒法も開発中である。

第68回 2006年5月22日

モンゴル国東部牧畜地域における近年の移住現象について

尾崎孝宏

(鹿児島大学法文部)

モンゴル国の総人口は1995年から2004年に12.5%増加しているのに対し、その間首都ウランバートル市の人口は43.8%増加している。こうした首都への人口集中は「エクソダス」と呼ばれるほどの大きな社会問題であったが、この種の「過疎化=都市集中」現象には、著しい地方性及び同一地域内部での偏差が見られる。一般に、移民発生の大なきっかけとして認識されているのはブッシュ要因として2000年にモンゴル全土を襲ったゾド（雪害）であるが、こうした偏差の存在を理解するためには、移住先のプル要因をも検討する必要がある。

本発表では、発表者がフィールド調査を行っているモンゴル国東部地域の中から、螢石鉱山が散在するヘンティ県南部ダルハン・ソムおよび隣接するドルノゴビ県イフヘット・ソムを、プル要因の検討材料として取り上げ、モンゴル国草原部に居住する人々の現在の生存戦略および「移動」とはいかなる現象であるかを検討したい。

第69回 2006年6月27日

「新・道の島々」センサーゾーン拠点形成 報告会

第70回 2006年6月26日

琉球列島における陸棲脊椎動物相とその起源?古生物学の視点から

大塚裕之

(鹿児島大学名誉教授)

種子島から与那国島までの1100kmにわたって

連なる琉球列島には、1～3万年前に絶滅した陸棲脊椎動物の化石種を多産するほか、絶滅を免れた固有種が多数現棲しており、島嶼における生物の多様性の形成過程や進化を研究する上で、世界でも最も重要な地域の一つとなっている。それらの化石ならびに現生脊椎動物相は、第四紀更新世の水期における数回の陸繋期に大陸から渡来した動物群の遺存種である。それらの起源ならびに渡来時期については、従来、古生物学的あるいは分子生物学的な多くの学説が提唱されてきたが、その解答となるべく説得性のある実証的データが十分に示されているとは言えなかった。近年の同列島における地質学的・古生物学的研究成果は、1)その最古の動物群が、中国大陸は揚子江下流域の鮮新世脊椎動物化石群に起源を求めることができること、2)列島へ渡来後、150万年以上にわたって島嶼へ隔離され、適応・繁栄し、多様化し、また、あるものは種分化し、そのうちの大型哺乳類・爬虫類は1～3万年前のウルム水期の寒冷期に一斉絶滅した、3)この寒冷期に絶滅を免れた種が、琉球列島の現棲動物群の母体となった、などである。

第71回 2006年7月3日

Culture and cultural identities in contemporary island societies

Philip Hayward
(Macquarie University)

In the late 20th and early 21st Centuries island cultures have been affected in various ways by the spread of global (and inter-local) economies and media operations. The global nature of this phenomenon marks it out from preceding local incidents of change occasioned by external and internal factors.

Drawing on the speaker's research in the

Whitsunday archipelago (off mid-north coast Queensland, Australia), south eastern Pacific islands such as Lord Howe and Norfolk; New Britain and Mioko island (Papua New Guinea), Ogasawara and Pitcairn Island, the presentation will examine aspects of the relationship between natural and cultural heritages in Small Island Cultures.

Discussion will identify the simultaneously fragile and tenacious nature of island cultures and how this balance affects cultural survival and mobility. The paper will go on to develop assertions based on a reading of Jared Diamond's 2005 book *Collapse: How Societies chose to fail or succeed*. After identifying the relevance of Diamond's work to small island cultures, the paper will propose a set of related factors to explain and typify the development and re-stabilisation of small island cultures during periods of change. An understanding of the role of periods of cultural turbulence will be proposed, with particular regard to migration patterns across islands. Discussion of various facets of migration to island communities will focus on the nature of change occasioned by new settlers.

Following on this discussion, the paper will then address parallels between ecology and Green politics in understanding culture. Drawing on the work of geographers such as Eric Carter and his approaches to "biocultural geography" the paper will explore this notion and its complexities. Through a brief critique, the paper will propose an agenda for engaged and supportive island research with regard to the founding principles of SICRI (as identified at www.sicri.org and in Hayward [2005]).

In conclusion, the paper will address the role that

imagination plays in societies and the manner in which heritage forms can be understood to embody social imagination.

第72回 2006年9月25日

Environmental Quality and Economic Growth: The Case of Pacific Island Countries

John Asafu-Adjaye
(多島圏研究センター)

Does environmental quality improve as a country develops? This question has been the source of intense debate since Grossman and Kruegers landmark paper in 1991 on the environmental impacts of the North American Free Trade Agreement. In that study, the authors concluded that there is an inverted U-shaped relationship between pollution levels and income. That is, there is an increasing level of pollution for people living in lower income countries. However, as incomes rise, pollution levels decline. This phenomenon has now come to be known as the environmental Kuznets curve (EKC) after the nobel prize winner Simon Kuznets who proposed a similar relationship between income inequality and income level in 1955. The existence (or non-existence) of an EKC has significant policy implications. For example, if it is true, it provides justification for the view that pollution is a necessary evil for countries at an early stage of development and that economic growth is the key to solving environmental problems.

Although the EKC debate has generated a considerable number of empirical studies, none so

far have specifically considered the case of the Pacific Island countries (PICs). At this seminar, the speaker will present the results of his research on the relationship between environmental quality and economic growth, with specific attention to the PICs. It will be argued that the PICs are diverse in terms of land area, population, resources, ecosystems and levels of economic development. Therefore, the results of studies conducted elsewhere may not be applicable to these countries. Following presentation and discussion of the results, the policy implications for improving environmental quality in the PICs will be addressed.

第73回 2006年10月16日

村落共同体崩壊の構造—トカラの島じまと臥蛇島無人島への歴史—

皆村 武一

(鹿児島大学法文学部)

今回の報告は、人間が生活していくうえで、自然的・社会的に限界的存在であるトカラ列島の諸島、なかでも臥蛇島で、人々は太古の昔からどのような組織や掟のもとに生活を営んできたのか、そして、近代化、商品・貨幣経済の進展にともなって、共同体社会はどのように崩壊していったのかを明らかにすることを目的としている。そこで、以下の順序で考察していくことにする。

1. 島嶼社会の一般的特質
2. トカラの島じまの自然的・社会的特長
3. 臥蛇島の部落規定及び金銭入出帳簿の分析
4. 全島民離村に至るまでの過程
5. 市町村合併をためらう十島村の現状

多島圏研究センター外国人客員教授 (2006年)

2006年は2人の外国人客員助教授を招聘する予定です。2006年7月から2006年11月までクイーンズランド大学の John Asafu-Adjaye 助教授を招聘しました。専門は経済学です。



研究室における Asafu-Adjaye 助教授

My Experience in Kagoshima

John Asafu-Adjaye

Before I begin, I think it would be appropriate to give a little background about myself. I was born in Ghana and had my high school and university education in Ghana. I then left Ghana to do my master's and PhD degrees overseas. I have taught in Jamaica (University of the West Indies), Canada (University of Alberta), and Papua New Guinea (University of Papua New Guinea). I am currently teaching and conducting research at the University of Queensland in Brisbane, Australia. I am married with two children who have Ghanaian, Canadian and Australian nationalities.

I found out about the research program at the Kagoshima University Research Center for the Pacific Islands (RCPI) through my colleagues at

the University of the South Pacific, with whom I am currently involved with a 3-year research project. Since I also conduct research on the Pacific Islands, I thought this would be a good opportunity to link up fellow researchers in Japan. I was therefore overjoyed when I received email from Kagoshima University informing me that I had been selected as the visiting foreign researcher. I arrived in Kagoshima on July 5, 2006 to begin my three-month research visit at the RCPI. I had previously been to Tokyo on a three-day package tour. But this was the first time I was going to stay in Japan for an extended period. Therefore, I was looking forward to my visit with great expectations. Aerial views of Kagoshima as our aircraft came in to land were spectacular. The drive from the airport to the city also showed me some amazing mountain scenery which was in sharp contrast to the concrete jungle of Tokyo. I quickly discovered the friendliness and helpfulness of the people of Kagoshima. On my first day of reporting for work, I got lost trying to get from my flat to the university, which is supposed to be only a 10 minute walk. Even though I did not speak a word of Japanese, there were many people who were eager to help me get to my destination. After using a lot of sign language, I finally arrived at the university.

My work at Kagoshima went well. The major objective of my research was to conduct an empirical investigation into the relationships between environmental quality and economic growth of Pacific Island economies, and to make

policy recommendations for the improvement of environmental quality in the Pacific Island region. The main finding of my study was that in the majority of the countries, a higher level of economic growth was associated with an improvement in environmental quality. However, it was concluded that economic growth by itself will not solve environmental problems. In order for environmental quality to improve in the Pacific Island countries, there is an urgent need for policies to control pollution. The results of the research were presented at a seminar at RCPI on September 25, 2006. It has also been submitted for publication in the journal, *South Pacific Studies*, published by RCPI.

I also took the opportunity, during my visit, to interact with Kagoshima university researchers and students. I contributed to the teaching of the first year course, *Islands in the South Pacific* No. 1:

Islands and Sea. I had regular meetings and discussions with the RCPI research staff conducting field research in the village of Naikawanga in Fiji. I also made a visit to the following institutions to learn about their research activities and to exchange ideas: Asian Productivity Organisation, National Graduate School for Policy Studies, and Tokyo Institute of Technology.

Overall, my visit to Kagoshima has been a rewarding one. It was a unique opportunity to learn about the Japanese culture and way of life. I learned a few basic words of the Japanese language. More importantly, I was able to sample the delicious Japanese cuisine and master the use of the *hashi*. I have made many friendships which will last for a lifetime. I would like to again express my gratitude to Kagoshima University and the wonderful RCPI staff for making my visit an enjoyable one.

お知らせ

多島圏研究センターは「多島域における小島嶼の自律性」というプロジェクトを現在行っています。

- ・2006年度は科学研究費補助金（環礁域の環境変動：国際共同研究による拠点形成）と鹿児島大学教育活性化経費（太平洋島嶼共生圏構築にむけた国際共同研究）をもとにミクロネシア連邦チューク州において学際研究を行っています。

(<http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/project-chuuk.html>)



第一次隊の参加者（グアム大学の教員と共に）



ロマナム島でのインタビューの様子

- ・科学研究費補助金（環礁域の環境変動：国際共同研究による拠点形成）をもとに国際シンポジウム「気候変動とグローバリゼーション：太平洋島嶼域における環境変動と人々の暮らし(仮)」を2007年2月に開催予定です。

多島圏研究センターを中心に鹿児島大学とグアム大学は学术交流協定を締結しました。

富永センター長、野田教授、長嶋教授、桑原教授、田島教授、河合助教授はグアム大学マイクロネシア研究所を訪問し、今後の共同研究の打ち合わせと学長の表敬訪問を行いました。



富永センター長(左)とグアム大学学長(右)



グアム大学マイクロネシア研究所と多島圏研究センターの打ち合わせの様子

多島研だより No.51 平成18年11月29日発行

発行：鹿児島大学多島圏研究センター
〒890-8580 鹿児島市郡元1-21-24
TEL：099 (285) 7394
FAX：099 (285) 6197

E-mail：tatoken@kuas.kagoshima-u.ac.jp

URL：http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/index-j.html/
